

館蔵資料紹介No.19

『寺山修司実験映像ワールド』について

内田 勝

附属図書館本館2階に置かれたビデオテープの棚には、教材中心のビデオ資料に混じって、なんとも毒々しいパッケージが異彩を放つ6巻組のビデオが並んでいる。詩人・劇作家としても知られる寺山修司が監督した前衛的な短編映画を集めた、『寺山修司実験映像ワールド』（ダゲレオ出版、1993年）である。

私がこれらの短編を見たのは、泉鏡花の小説を映画化した寺山の中編『草迷宮』を見に行ったときに、同時上映されていた『消しゴム』（1977年）に出会ったのが最初だったと思う。孤独な老女が、かつて海に消えた夫（または恋人）である若い海軍士官の思い出に浸ろうとするが、彼女の記憶の画像は、スクリーン上に出現した半透明のクラゲのような染みに徐々に触まれていくか、あるいは画面を横切る巨大な手に握られた消しゴムによってぐいぐいと消されていく。

寺山修司はこの映画について語っている。「これは・シミのある映画・の試みであり、消しゴムで消すことのできる映像の試みでもある。（中略）この映画は、記憶の修整の映画でもあるわけで、時間の経過を通して一人の老女のさまざまな過去がよみがえってくる。臉の裏を通りすぎてゆく過去。そのまばたきの一瞬映画。あるいは打ちよせて返してくる波のような時間の皺。そういったものを記録してみたい、というのが、この映画の意図なのであった」（『寺山修司イメージ図鑑』〔フィルムアート社、1986年〕）。

映像じたいが消しゴムや染みに消されていくという実験的な技法もさることながら、冒頭、どんよりした空の下で浜辺に打ち寄せる波を写しただけのショットが、なんとも禍々しい雰囲気を漂わせていたり、白い制服を着た海軍士官がゆっくり振り向いて、なぜか邪悪な微笑を浮かべたり、自らの水死体が砂浜に打ち上げられているのを眺める老女が、ぞっとするほど無表情な顔つきをしていたりといった、細部のイメージの奇妙な美しさにすっかり魅了されてしまった。哀調を帯びたゆったりしたメロディーの背後で、怒りのこもった和太鼓のリズムが激しく乱打される不思議な音楽（J・A・シーザー作曲）も、感傷趣味と過激さの入り混じった映像の効果をさらに高めていた。

それ以降しばらく、寺山修司の映画が上映されるたびに出かけていった。中でも印象的なのは、寺山修司追悼企画の一環として渋谷ジャンジャンで行われた上映会で、『審判』（1975年）を見たときのことだ。映画は板に白いペンキを塗った特性のスクリーンに投影され、その下には何本もの釘と金槌が置かれている。スクリーンに映し出されるのは、道路に五寸釘を打ち込む男、開いた本のページに釘を打ち込む老人、巨大な釘を十字架のように背負う男、男が金槌で釘を打つことによって身悶えする女といった具合である。徹頭徹尾釘だらけのこの映画は、最後の7分間で観客たちが自らスクリーンに釘を打ち込んでいき、白い光が投影されるだけのスクリーン全体が釘に覆われたところで終わっている。

ところがこの日は、アナウンスがあってもしばらくは誰も観客席を立とうとせず、ようやくオタク風の若い男女数人がおずおずと歩み出たのだが、彼らはいかにも80年代半ばの若者らしく、実に行儀良く、コンコンと小さな音を立てて釘を打ち始めたのだ。そのあまりの格好悪さに、会場には白けた空気が充満していく。自分だっていざステージに上がれば彼らと同じようにしか打てないかもしれないと思うと、いまさら席も立てない。気まずい数分間が過ぎていった。

その時突然、中年の女性が観客席から立ち上がると、「てめえら何やってんだ！ これは、こういう風にやるんだよ！」と叫び、スクリーンに突進してきた。彼女はそこに置かれた金槌を引つつかむと、その金槌そのものを猛烈な勢いでスクリーンに叩きつけたのだ。他の観客は呆気にとられ、女性が立ち去った後の画面を見つめた。そこにはスクリーンに対して垂直に屹立した金槌が、周囲にちょこちょここと打たれた細い釘たちを威圧するように、映写機の放つ白い光に照らされ、大きくひびの入った板の上に黒々と影を落としている。それはそれで、この映画の終わりにふさわしい映像だった。もともと上映のたびにある程度異なった展開をする可能性を秘めた映画ではあるが、その中でも特異な上映を目の当たりにしたことになる。なんだかとても貴重な体験をしたような気になり、興奮してしまった。

もちろんそうした興奮は、本館3階の視聴覚コーナーのブースに座って『審判』のビデオを見たところで、到底得られるものではない。問題の場面になっても、観客である私はテレビ画面に直接釘を打ち込むわけにはいかないのだ。せいぜい、ビデオ版にはあらかじめ録音された、大勢の人間がスクリーンに釘をガンガン打ち込んでいく大音響をヘッドホンで聞きながら、この映画が本来の形で上映された映画館の情景に思いを馳せるしかない。

スクリーンに映った娼婦たちの挑発に乗せられた観客の一人が、実際にスクリーンの中に入り込んで女たちに身ぐるみ剥がされる『ローラ』(1974年)もまた、ビデオでは面白さが半減してしまう映画だ。この作品が映画館で上映されるときには必ず、森崎偏陸氏の演じる「観客」が、1974年当時と同じ衣裳を着て観客席に座り、切れ込みの入った特製スクリーンをくぐり抜けて映画の外側と内側を行き来するのである。

画面上の娼婦が語っている。実験映画なんぞを見に来るのは、自分でも映画を撮り始めた映画青年か、裸が出てくるのを期待してやって来る出歯亀サラリーマンくらいだ。

「そういうのがさ、暗いなかになさ、ずらーっと、ほら、ずらーっとならんでるわけですよ。バーっと。ね。壮観だよ」。清潔で明るい図書館の一室でそれを見ている私は、この挑発をどう受けとめればよいのだろうか？ どこかで同じように一人このビデオを眺めている、孤独な観客たちの集団を想像するしかない。そうした観客の一人が、テレビ画面に映る女を目がけてピーナツを投げ込み、やがてビデオの内側の世界に吸い込まれるのだ——そう想像してみても、観客が画面内に入り込む瞬間に立ち会えない物足りなさは残る。

ビデオ版にはこうした限界があるとはいえ、岐阜で上映される機会が多いとは思えない寺山修司の実験映画を、手軽に見ることができるのは嬉しい。この6巻組ビデオには、上に名前を挙げた映画の他にも、本を2m離れたところから望遠鏡で読む男や、本を一字読むごとにその字を×印で消していく男が登場する『書見機』(1977年)、影が人を離れて別行動を取りはじめる『二頭女——影の映画』(1977年)、映画の中の女に夢中になった男の悲しい恋を描いた『一寸法師を記述する試み』(1977年)、寺山自身の「眼帯に死蝶かくして山河越ゆ」という句を母胎として生まれた『蝶服記』(1974年)、3面マルチスクリーンにそれぞれグリーン、ピンク、ブルーに染められた異なる映像が同時に投影される3分間の映画『青少年のための映画入

門』(1974年)など、興味深い映画がいくつも収録されている。

本館3階の映画関連書コーナーに置かれた『寺山修司 青少女のための映画入門』(ダゲレオ出版、1993年)は、これらの映画のための格好のガイドブックだ。「寺山修司実験映画の正しい上映の仕方」という文章は、それぞれの映画のための特殊なスクリーンや演出法を説明したマニュアルで、ビデオ版には何が欠落しているかがはっきりと分かり、そうした要素を想像で補うためのよすがになる。数人の書き手による寺山映画論にも説得力があり、かわなかのぶひろ氏の「寺山修司は、演劇においても映画においても、古典的なドラマツルギーの絶えざる破壊者だった。観客をドラマのとりこにするよりも、その意識を覚醒させ、思考させることに心血を注いでいた」という言葉や、マリア・ロベルタ・ノヴィエツリ氏の「観客は、たしかに映像のフィクションに直接巻き込まれることはなく、スクリーンの前にじっと座ってはいるのだ。しかし、動き回っているのは、実のところ観客自身なのである」という言葉を頭に詰め込んでビデオを見れば、楽しさは倍加するかもしれない。

なお、寺山が撮った実験映画の代表作『トマトケチャップ皇帝』(1971年)は、子供たちが大人の管理に反逆して一斉蜂起する話だが、この6巻組ビデオには27分の短縮版しか収録されておらず、字幕がドイツ語で表示されることもあって、筋を追うのが非常に困難になってしまっている。のちに同じシリーズの第7巻として出された105分の『トマトケチャップ皇帝』オリジナル・ディレクターズ・カット版は、残念なことに館蔵されていない。しかしその内容は、映画雑誌『イメージフォーラム』のウェブサイト内にある『トマトケチャップ皇帝』のページに再録されているので、このページを覗いておおよその内容を把握してからビデオを見ることをお勧めする。

この文章を読んでもくださっているあなたは、検索エンジンでこのページにたどり着いたのでなければ、岐阜大学の関係者のはずである。興味を持っていただけたなら、近いうちに機会を見つけて、ぜひこのビデオをご覧になっていただきたい。これまでに経験したことのない、図書館でのもう一つの遊び方が見えてくるはずだ。

(うちだ まさる:地域科学部講師)